## ＜第 15 回東区緩和医療を考える会」報告＞

●参加者数：計 89 名
　　院外 55 名（うち医師 7 名）
　　院内 34 名（うち医師 4 名）

●演題1：「急性期病院内科における化学療法の適用基準について」
　　福岡和白病院　化学療法センター長　柴田義宏

　内容：病理診断で、がんが確定し、組織型も判明し、PS（performance stauts）が 0～2 の方が化学療法適用。外来通院が可能な状態。
　　切除不能のがんに対する化学療法の目的は、「延命」と「症状緩和」。
　　QOL 維持目的。副作用が QOL を損なうようになってくると、適用外。緩和ケア医療との連携。

●演題2：「在宅医療につなげた事例紹介」
　　福岡和白病院　医師・看護師・MSW
　　伊東内科小児科　伊東　洋　先生
　　訪問看護ステーションレイル　野崎　仁美　先生
　　田中調剤薬局　田中範江　先生

　内容：40 代　すい臓がん末期患者。他病院より緩和医療病院への調整目的で当院へ転院。本人は、在宅退院希望され、在宅医療スタッフと協力し在宅へ。
　　薬剤調整だけでなく、母親、祖母、子供との関係調整も必要だった方で、家族関係の調整に、ケアマネ、在宅医師、訪問看護師、薬剤師、それぞれが関わった。
　　本人希望で、在宅退院されたが、家族関係の不具合と、せん妄の出現もあり、緩和ケア病院へ。しこりを残す事例であったが、現実に起きた事例として紹介。

　　※発表者については、案内参照

以上となります。

福岡和白病院　医療連携室　萩尾敦子